42 友情、信頼 × 規則の尊重

お見舞い

年　　組（　　）

ハルコとトモミは、仲良しだった。

あるとき、トモミは足の骨を折ってしまって、３週間入院することになった。

面会できるのは月曜日だけだったので、毎週お見舞いに行くことを約束した。

「絶対、お見舞いに行くからね。」

「ありがとう。いそがしいのに、ごめんね。」

「ううん。私も楽しみにしているんだから。」

学校から帰って、お見舞いに行く準備を始めた。

「みんなからの色紙も入れたし、準備万端。あれ――？

120円、足りないな。」

財布のお金が足りなかった。病院まで、電車に乗って行かなければいけないのに。

今日は親が仕事なので、家にはだれもいない。そのとき、ハルコは思い出した。

「お母さん、貯金箱に小銭を貯めていたな――。」

貯金箱をふると、ジャラジャラと音がする。これは、「チリも積もれば山となるって言うからね。おつりを貯めているの。」と、お母さんが楽しみながらやっている貯金だ。前に一度だけ、お母さんは厳しく言っていた。

「これは大事なお金だからね。だまって使わないでよ。どうしても必要だったら、事前に言ってちょうだいね。」

お母さんに電話をしてみるが、出てくれない。

このお金は、勝手に使ってはいけない。しかし、この貯金を使わなければ、今日のお見舞いには行けない。あとで返せば、お母さんもきっとわかってくれるだろう。でも――。

ハルコは、どうするべきでしょうか。あなたの考えと理由を書きましょう。

話し合って考えたことを書きましょう。